

令和元年度
第29回島根県雲南市

永井隆 平和賞

| 入 | 賞 | 作 | 品 | 集 |

島根県雲南市教育委員会

もくじ

小学生低学年の部

最優秀賞 せんそうをわすれない

優秀賞 「かわりばんこ」 ってすてきだな

佳作 命のバトン

佳作 いっぱいやさしくするよ

兵庫県・西宮市立南甲子園小学校

島根県・雲南市立掛合小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

大 恵 朱 実

石 飛 里 花

加 藤 想 大

田 中 悠 翔

小学生高学年の部

最優秀賞 私にもできるボランティア

優秀賞 あこがれの母

佳作 一つの命のすばらしさ

佳作 博士と父

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立西日登小学校

島根県・雲南市立鍋山小学校

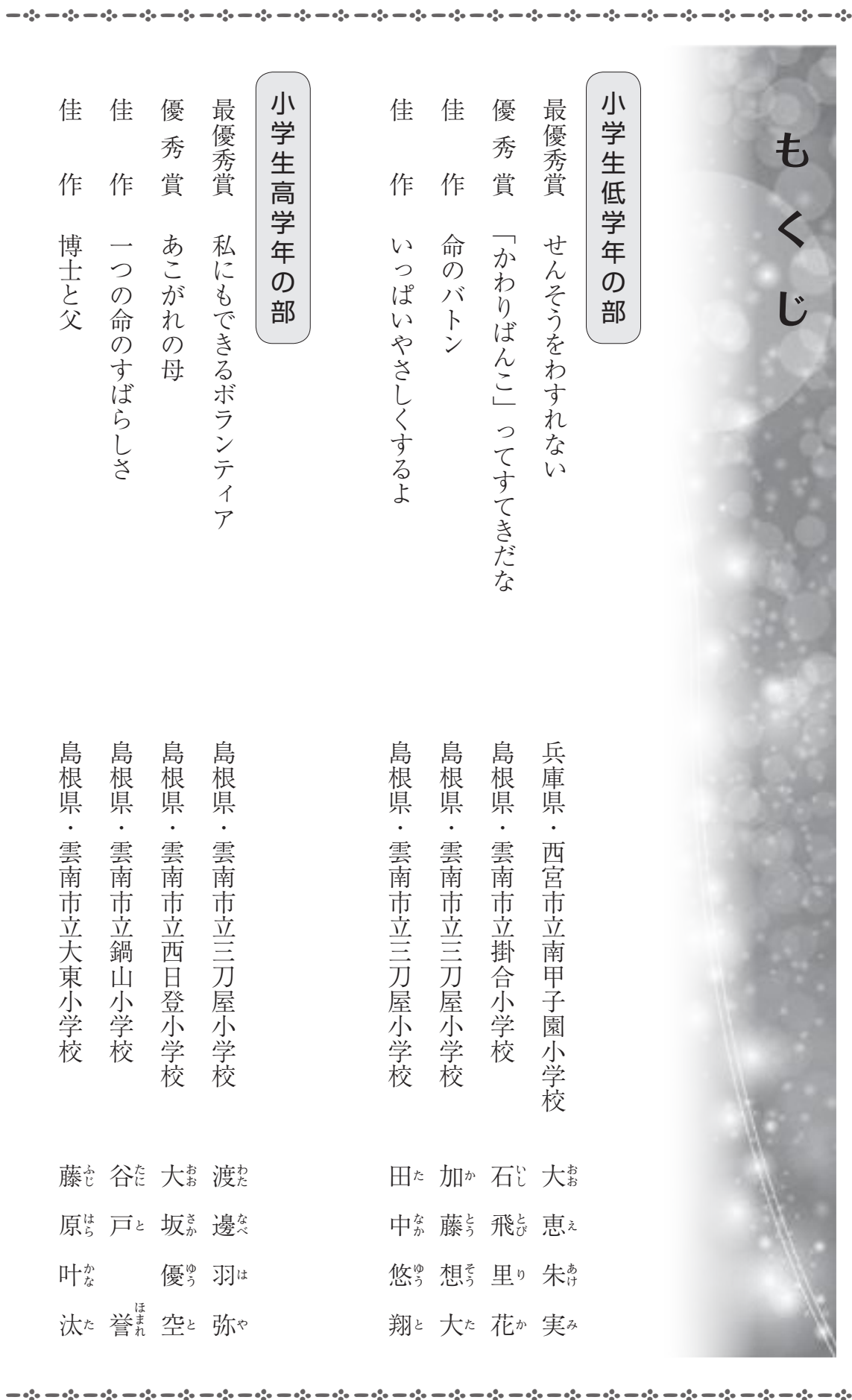
島根県・雲南市立大東小学校

渡 邊 羽 弥

大 坂 優 空

谷 戸 誉

藤 原 叶 汰



中学生の部

最優秀賞 知らないという罪

優秀賞 生きる

佳作 つまらない平和

佳作 平和へのキツカケ

大阪府・大阪教育大学附属池田中学校

島根県・雲南市立海潮中学校

大阪府・大阪教育大学附属池田中学校

長崎県・長崎市立淵中学校

林 瑞季

岩田 涼花

高橋 舞衣

原田 晋之介

高校生の部

最優秀賞 誰かを想って

優秀賞 如己く私の核廃絶く

佳作 真の平和とは

佳作 平和とは

埼玉県・東洋英和女学院高等部

広島県・盈進中学高等学校

沖縄県・沖縄県立首里高等学校

島根県・島根県立三刀屋高等学校

中山 純花

馬屋原 瑠美

金城 琉夏

山口 俊樹

一般の部

最優秀賞 平和のたすき

優秀賞 私の願い

佳作 なれし故郷を放たれて

佳作 平和への道

東京都

埼玉県

山梨県

神奈川県

小松崎 潤

吉澤 恵子

入倉 文子

田村 智子



最 優 秀 賞

せんそうをわすれない

兵庫県西宮市立

南甲子園小学校二年

大 おお 恵 え
朱 あけ
実 み

わたしは、ひろしまけんにある「うさぎじま」に行きました。たくさんのうさぎがいて、とてもかわいかったです。そのことをひろしまにすんでいるおばあちゃんに話しました。でもおばあちゃんは、うさぎじまをしりませんでした。うさぎじまの本とうの名前は「大くのじま」と言います。大くのじまときいておばあちゃんは、「どくガスの…」と言いました。

むかしこのしまでは、せんそうでつかうためのどくガスがつくられていました。そのことをしつて、かわいいうさぎからはそうぞうがつかず、こわいなとおもいました。そしておばあちゃんが、何十年も前にどくガスが

くられていたことをおぼえていることに、おどろきました。

おばあちゃんがこどものころ、日本はせんそうをしていました。まだこどもだったおばあちゃんも、せんそうでつかうどうぐをつくらされていました。げんばくでひばくしたおばあちゃんは、たべるものも家もなくて、たいへんだったそうです。「今はべんりだね」と、おばあちゃんは言います。

きつとおばあちゃんは、せんそうでたいけんしたかなしいこと、こわかったこと、たいへんだったことをわすれないとおもいます。わたしたちも、せんそうのことをわすれてはいけないとおもいます。なぜなら、日本がへいわなのはせんそうをけいけんした、おばあちゃんのような人がいるからです。せんそうでつらかったおもいは、大じなことだとおもいます。おばあちゃんから聞いた話をわすれずに、人まかせにしないで、まい日の生かすにかんしやをしながらくらしたいとおもいました。

優 秀 賞

「かわりばんこ」って

すてきだな

島根県雲南市立

掛合小学校三年

石^{いし} 飛^{とび} 里^り 花^か

「かわりばんこ」、わたしは、その言葉を今まで聞いたことも、使ったこともありますが、人と人がたすけ合うという意味があることをはじめて知りました。

六月に社会科見学で吉田町の高どのに行きました。そこでむかしのてつの作り方を話してもらいました。きかいの中に空気を入れてあつくするために、ふいごというシーソーのようなものを足でふみつけけないといけないと言われました。その仕事をしていた人は、番子さんと呼ばれていたそうです。番子さんはずっと空気を入れつけけないといけないので、と中で交代します。そのと中で交代するようすから「かわりばんこ」という言葉がで

きたと聞きました。わたしは、もし番子さんが一人だったら、その番子さんがつかれて、休けいしたいと思ってできないので、とてもくるしいと思いました。でも二人いれば、やっている人がくるしくなった時に、「かわって。」

と言って、もう一人の人が、「いいよ。」

と言えばかわることができます。わたしは、番子さんがかわりばんこに仕事することは、たすけ合いだと思いました。

わたしも学校で、たすけ合いが大切だと思うことがあります。計算ドリルが早く終わった時に先生に、

「ミニ先生をしてくれる？」

と言われたことがあります。問題が分からなくてこまっている友だちにやり方を教えてあげると、

「ありがとう。」

と言ってくれて、うれしい気持ちになりました。わたしも分からない問題を友だちに教えてもらうことがあるので、たすけ合いだと思いました。ほかに、学習発表会の練習の時に先生が、

「もしとなりの人がセリフをわすれちゃったら、となりの人がセリフをおぼえておいて小さな声で教えてあげるんだよ。」

と言われました。こまった時は友だちがたすけてくれて、友だちがこまったらたすけるので、これもたすけ合いだと思いました。

わたしは、休み時間に友だちと一りん車をして遊んでいます。一りん車の数は、かぎられているので、みんなで、かわりばんこに使わないと、のれない人が出てきます。わたしは、みんなの一りん車なので、早いもの勝ちや、一人がずっと使うのではなくて、かわりばんこに一りん車を使って、みんながうれしい気持ちで遊べるようにしたいです。

わたしは、「かわりばんこ」というのは、たすけ合いだと思います。たすけた方もたすけられた方も幸せな気持ちになれるからです。わたしは、雲南市で生まれたこの「かわりばんこ」という言葉を大切にして、これからも友だちとたすけ合っていきたいです。

佳 作

命のバトン

島根県雲南市立

三刀屋小学校三年

加^か藤^{とう}想^{そう}大^た

ぼくは、戦争のおそろしさを本当には知らない。でも、昔の人は知っている。それを父は、語って教えてくれた。父は、老人ホームではたらいっている。ぼくは、父といっしょに行くことがある。そこでくらすおじいさんおばあさんは、とてもやさしく、いつもにこにこしている。けれど、ある日、父はおじいさんおばあさんの悲しみについて話してくれた。おじいさんおばあさんは、よく父に戦争の話をされるそうだ。お兄さんが戦争に行っただけで、なくなられ会えなくなった悲しみ。戦争で弟のうでがなくなってしまった苦しみ。父は、悲しい顔のおじいさんおばあさんを見るのがつらいそうだ。だけど、

平和の大切さを教えてくださっているの、じっくり聞くと話していた。そして、そのことを、ぼくにも伝えておきたいと話してくれたのだ。ぼくは、戦争はおろかだと思った。悲しみしか残らないのだから。父は言った。今は平和だ。だから、けんかをしたり、ぼう力を使ったリせず、ぼくに命を大切にしてほしいとも。

はかせは、「てきをもあいしあいしぬきなさい。」と言って、てきの国の人も助けられた。白血病になっても、人の命を助け、平和をうったえ続けられた。命のパス名人だと思う。

ぼくのたん生日は、二月十四日の予定だったけど、一日おくれて十五日になった。同じ二月十五日にそ母の兄がなくなつたとそ母から聞いた。大おじは、二ヶ月しか生きられなかった。はいえんで、こきゅうこんなんになつたらしい。苦しかっただろうな。小さい赤ちゃんなのに。ぼくは、大おじの命が、ぼくの中に入っているような気がする。ぼくは、大おじの分も生きたい。ぼくは、たくさんの人々の命のバトンをもらって生きている。

ぼくは、今楽しいことがいっぱいある。初めてローラーブレードにのれた事。初めてバスケットでシュートが

入った事。うれしかった。

うれしいこと、悲しいこと、それはみんなそれぞれちがう。ちがうから、一人一人の命だと思う。動物だって、虫だって、形はちがうけど、命がある。みんな生きている。

ぼくは、ヒメゲンゴロウの幼虫を近くの池で見つけてかっている。ヒメゲンゴロウは、何度も何度も皮をぬいで大きくなる。モンシロチョウもすごい。小さなたまごから青虫、そしてさなぎになる。さなぎはじつとしていくけど、ある日、ちょうになつてとんでいく。そして、たまごを生む。自分の力で生きぬいて、命のバトンをつないでいる。ぼくもだ。ぼくも、命のバトンをつないでもらって、今生きている。今バトンを持っているのはぼくだ。そう思うと、ゆう気がわいてくる。悲しくてつらくて泣いてしまう時もあるけど、大切な命をつないでもらったのだ。ぼくにはできると信じて、つき進んでいきたい。父が教えてくれた命を大切に生きること。それは、自分の力で、未来を切り開いていくことだ。

佳 作

いっばいやさしくするよ

島根県雲南市立

三刀屋小学校一年

田^た中^{なか}悠^{ゆう}翔^と

ぼくは、四がつからみとやしようがつこうの一ねんせいになったよ。にゆうがくしゃしんをみんなでとったとき、ともだちができるかなとわくわくしたよ。

つぎのひのあさ、しょうがつこうにあるいていくのに、まだいったことがなかったから、どんなかんじかなとおもっていたよ。いってみたら、たいへんだったよ。ほいくしよのとき、おばあちゃんと一かい、あるくれんしゅうをしたよ。そのときは、ゆつくりいけたけど、がつこうのときは、けつこうはやいし、じかんがきまつているから、たいへんだったよ。おまけに、あめがふつて、くつもぬれるし、ぼうしからしずくがぽたぽた、

かつぱにもあめがしみたよ。ひゃくろくじゅうだんのいしだんまであって、たいへんだったよ。

かいだんでちよっとおくれたとき、とちゅうではんちようが、とまってまっていてくれたよ。やさしいなおもったよ。とうこうのとき、はんちようは、ぼくやほかの一ねんせいがれつからはみだすと、「ちゃんとならんで。」とみんなにこえをかけてくれるよ。くるまがくると、「はしによって。」とこえをかけてくれるよ。はんちようは、いいかんじのペースであるいてくれて、ときどき、「あともうちよつとだよ。」とやさしくこえをかけてくれるよ。すごいな。だから、うれしいきもちで、がんばつてあるけたよ。こえをかけてもらうと、きもちがもりあがるよ。がんばれるきもちになるよ。がつこうでも、はんちようは、ともだちを、「かつこいいね。」とほめていたよ。そのことばをきいて、ぼくまでうれしいきもちになったよ。かつこいいな。

がつこうで、ながいはかせのことをべんきようしたよ。ひとをいっばいたすけたはかせとはんちようは、やさしくするところがいていとおもったよ。ぼくも、はんちようみたいなひとになりたいな。

ぼくのとうこうはんには、一ねんせいで、まだいっしょにあるいていけないともだちがいたんだ。ぼくは、そのこにきてほしいとおもっていたよ。六がつのあるひ、おうちのひとといっしょにきたよ。ぼくは、うれしくて、「おはよう。」といったよ。そのひから、いっしょにあるいているよ。

すいえいのがくしゅうのとき、しょうやくんが、みずがこわかったから、ぼくは、そばにいたよ。みててあげたよ。「しょうやくん、ちよつとだけ、かおをつけてみて。」っていったら、そうしたら、じぶんでかおをつけたよ。しょうやくんは、すごいなとおもったよ。ぼくもうれしくなったよ。

これからも、はかせのように、はんちょうのように、ぷうるのときにしたみたいに、ちよつとだけ、ひとにしつてることをおしえたり、てつだったりして、やさしくすることをいっばいしていきたいよ。

最 優 秀 賞

私にもできるボランティア

島根県雲南市立

三刀屋小学校四年

渡 わた
邊 なべ
羽 は
弥 や

私は、かみを長くのばしています。私は、ヘアドネーションをしたいのです。

三年生になるまで、私はヘアドネーションのことを知りませんでした。ある日、中学生のいとこが、こしの辺りまであった長いかみの毛を切ったのを見て、せっかくのばしたのに、なぜ切ってしまったのかと思いました。いとこは、テレビでヘアドネーションのことを知り、三年くらいかけて長くのばしていたそうです。

ヘアドネーションとは、病気や事故でかみの毛がなくなった子ども達に、きふされたかみの毛を使って、ウィッグをおくる活動です。人のために役立つことなの

で、私もやりたいと思って、かみの毛をのばし始めました。

三年生からのばしているので、もう五十センチくらいになっています。長くなるにつれて、おふろでのシャンプーや、ドライヤーでかわかすのが大変になってきました。暑くなつて、あせをかくようになると、気持ち悪くなることもあります。でも、六十センチくらいになるまでは、がんばつてのばしたいと思っています。

かみの毛がなくなつてしまつて、どんな感じなんだろうと想像してみました。自分一人だけかみの毛がないと、きつと他のみんながうらやましくなります。病気や事故にあつてしまつたとしても、私は、やっぱりおしゃれがしたいです。おしゃれをすると、気持ちが晴れてきます。きつと、苦しいことがあつても、がんばろうという気持ちになれると思います。

私のかみの毛だけでは、ウィッグはできません。子ども一人のウィッグを作るためには二十人から三十人分の三十一センチ以上のかみの毛が必要です。そんなにたくさんの人が大切にのばした自分のかみの毛をおくつて、初めてできる、私の知らないだれかのためのウィッグ。

私は、このウィッグをもらう子がだれか分かりません。でも、その子はきつとうれしいだろうなと思います。かみの毛だけでも、私の「おしゃれできるよ。だから、元氣を出してね。」という気持ちが伝わると思いました。

私のボランティアは、家族や友達ではない、だれかを幸せにするための活動です。その人が、私に直せつ「ありがとう。」と言ってくれることはありません。でも、その人がうれしい気持ちになったかなとか、さつそくおしゃれしようかなという気持ちになっているかなと想ぞうすることで、私もなんだか幸せな気持ちになります。

だれかのために何かをするということは、お礼を言っ
てほしくてするのではなくて、人を喜ばせることで私も
うれしい気持ちになるってことだと分かりました。私の
かみの毛で作ったウィッグで、だれかがえ顔になってく
れるといいなと思います。

優 秀 賞

あこがれの母

島根県雲南市立

西日登小学校六年

大 おお
坂 さか
優 ゆう
空 と

昨年の、六月二十八日から七月八日にかけて西日本を中心とした集中豪雨があった。その時、ぼくの母はDMAT（災害派遣医療チーム）メンバーの一人として、三日間、広島県へ災害派遣に行くことになった。

ぼくは、DMATっていったいどんなことをするのだろうと思って、インターネットで調べてみた。DMATとは、医師・看護師・業務調整員（医師・看護師以外の医療職及び業務職員）で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（約四十八時間以内）に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チームであると分かった。

ぼくは、母が災害現場に行くと父から知らされた時とても心配になった。だけど、心のどこかで、「たくさんの人を助けてあげてね。」と、思う自分もいた。そして三日後、母は無事に災害現場から帰ってきた。ぼくはうれしくて、

「おかえり。よくがんばったね。」

と、母に抱きつきながら言った。母もとてもうれしそうだった。

それから数日後、学校の授業で、永井隆博士の資料集を読んだ。その中に書いてあった永井隆博士の言葉に、ぼくは目をうばわれた。

それは、

「あなたは、わたしが必ず助けます。」

と、いう言葉であった。言葉で言うとは簡単なことだけど、実際に行動しようと思うとは簡単なことではないと思った。けれど、永井隆博士は白血病で余命三年と言われ、また長崎に落とされた原子爆弾で被爆し重傷を負った。妻も被爆し亡くなった。永井博士自身も辛かっただろうけれど、たくさんの人を助けるため救護活動をした。もし、ぼくが永井博士の立場だったら、母の立場

だったら同じことができるだろうかと思った。

災害現場から帰った母は、ぼくにこんな話をしてくれた。

「お母さんも災害現場に行くことがすごく怖かったし、もしかしたら、もうみんなに会えないかもしれないんじゃないかと思ったら、少し涙が出そうになったよ。でも、お母さんが被災された方のところへ行くことで、何か一つでも役に立てることがあるんじゃないかと思って、被災地へ行ったよ。被災された方も帰る家がなかったりして大変なのに『ありがとう。』と言って下さったことがとてもうれしかったよ。」

ぼくは無事に帰ってきてくれてよかったとは思っていなかったが、母も人の役に立つために看護師という仕事を選び、責任を持って仕事をしているんだなとその時初めて思った。そんな母がかっこいいと思った。

ぼくの将来の夢は母のようになかったいい看護師になることだ。そして、DMATの一員となって、誰かの助けになりたい。

佳 作

一つの命のすばらしさ

島根県雲南市立

鍋山小学校五年

谷 たに
戸 と

誉 ほまれ

理科の授業で、メダカをかっていました。メダカがたまごを産んでから、クラスの人などでかわいがって、世話をしていました。メダカは一日一日少しずつ成長して、九日がたちました。朝、学校に来たら五ミリくらいの小さい小さいメダカが生まれていました。業間休みの間、たまごを観察していると、ピクッピクッと動き始めました。その後みんなで観察していると、頭をふって全身を動かして、小さなメダカが生まれました。約一時間の間ずっと見ていました。初めて命のたん生の瞬間をみました。とても感動しました。今までとっても小さかったたまごが、一つの命となったのです。（命の力はすご

いんだな。こうして命はつながっていくんだな。）と思いました。

生まれたメダカたちは、外の世界は気持ちいいな、というように元気に泳いでいました。

メダカの命。生き物の命。植物の命。動物の命。人間の命。みんな違って命は命。一つの命からたくさんの命がつながっているということ。世界に一つの大切な命。自分の命。

永井博士の本を読んで、戦争の現実を知りました。戦争、そして原爆という恐ろしいことのせいで、たくさんの命が一しゅんで消し去られました。生きていたくても生きられなかった人がいたこと。平和に生きたくても、生きられない人がいたこと。そんな人は、平和な今でも全世界にはいると聞きました。戦争に苦しむ人がいることがわかりました。そんな人たちを永井博士が助けたこともわかりました。永井博士も爆弾で家族を失い、自身もけがをしたこと、そんな状況でも人のことを一番に考え、みんなを助けていたことを知りました。

なぜ戦争なんか起こしたんだろう。なぜ平和に生きる道を選ばなかったのだろう。平和に生きる道を選ばな

かったのだろう。そんな疑問がぼくの頭の中にうかびました。

ぼくは昔の人々のおかげで、こんなにも幸せな毎日を送れていると思います。永井博士のおかげで、たくさんの人が救われ、それによって受け継がれた命がきつとあると思いました。永井博士の助けた命、そして受け継がれていく博士の思い。自分よりも人。「如己愛人」の精神。人を愛したら、愛が戻ってくるという考え方を多くの人が今までに引き継いできたからこそ、この素晴らしい島根、そして三刀屋があるのだと思います。

ぼくはこれからもいろいろなことに出会おうと思います。いいことばかりだとは限りません。でも、受け継がれてきた自分の命を大切にしたいと思います。あきらめずに続けること、今の自分を認め、これから素晴らしい世界をつくりあげていく一員でありたいと思います。

佳 作

博士と父

島根県雲南市立

大東小学校六年

藤 ふじ
原 はら
叶 かな
汰 た

「如己愛人」この言葉は永井博士が原爆症と闘いながらも書いた、「自分と同じように人を愛しなさい」という意味の言葉だ。永井博士とは、人々の苦しみ、悲しみ、憎しみなどが渦巻く戦争の中、自分の幸せよりも人を助けることを優先し、そして何より人を愛して生きた方である。

みなさんは、自分のこと以上に人のことを愛せているだろうか。私自身はできていないと思う。学校で困っている人がいるのを見かけても、恥ずかしさから声をかけることができなかったり、自分の用事を優先させてしまったたりすることが多い。博士はなぜあんなにも人のこ

とを思いやって行動することができたのだろうか。博士に直接会って話を聞いてみたいほどである。でも今やそんなことはできない。しかし、偶然にも私の身近に、博士のように人を自分と同じように愛している人がいる。それは、消防士である私の父だ。

ある日のことだった。私と父がサッカーの練習をしていると、父の携帯電話が鳴った。「事故だ。」父はすぐに現場へ向かった。何が起るか分からない危険な現場で人々を助ける父。私は父に尋ねたことがあった。「どうして命をかけてまで危険な現場で人命救助をするの。」父は答えた。「自分が行かなければたくさんの人が亡くなってしまう。だからだよ。」私は驚いた。私が予想していた答えとは全く違っていたからだ。私は、人助けをする嬉しい気持ちになる、というような答えが返ってくると思っていた。しかし、父の答えは違っていた。自分の気持ちなんて関係なかったのだ。父は博士と同じように「目の前で苦しんでいる人がいるから助ける。」「この人を助けることができるのは自分しかない。」という思いから、自分の身のことも忘れて人を助けてきたのだろう。

私は父と博士から大切なことを学んだ。私は今まで人命救助をすることは特別な人にしかできない難しいことだと思っていた。しかし博士の偉業や父を見てみると、人を助けること自体が当たり前のことなのだという事に気がついた。父と博士はそのことを知っていたからこそどんな危険な場面でも人のために一生懸命になれるのだろう。

私も父や博士のように、どんな場面でも人ごとだと思うのではなく、自分のことのように受け止め、すぐに手を差し伸べられるような人になりたい。困っている人がいたら積極的に声をかけ、手助けしたいと思う。父や博士のように大きな偉業は成し遂げられないかもしれないが、私たち一人一人の小さな積み重ねが平和な世界につながっていく、そしてみんなが安心して暮らせる社会になっていくことにつながるのだろうと私は思う。他ならぬ自分が、生きやすい未来を作っていく一人なのだ。一人でもその考えを持つ人が増えることが、生きやすい未来への近道だ。

最優秀賞

知らないという罪

大阪教育大学附属
池田中学校三年

林 はやし

瑞 みず

季 き

戦争は怖い。戦争は二度と繰り返してはいけない。身
近に戦争の記憶のある人がおらず、原爆を落とされた広
島県や長崎県に住んでいるわけでもない私は、ただぼん
やりとそう思っていただけだった。そんな私は、小学校
六年生の時に修学旅行で広島へ行き、鉄骨部がむき出し
になった原爆ドーム、広島平和記念資料館の目や皮膚が
熱線によりたれている人形、炭化したご飯の入ったお弁
当箱を目の当たりにして、とてつもない衝撃を受けた。
原爆の被害のほんの一部をただけに過ぎなかったが、
それだけでもこんなに恐怖を感じた私は、戦争について
何も知らなかったんだと思い知った。それと同時に私は、

「知らない」ということへ恐怖を感じるようになった。
知らないが故に犯してしまう過ちも少なくないと思っ
た。だから私は、中学三年生の長崎への修学旅行の事前
学習に真面目に取り組んだ。その中で私は、「焼き場に
立つ少年」という、一枚の写真を見た。兄弟を原爆によ
り失った悲しみや苦しみを必死におさえ、唇から血が出
るほどきつくかみしめ涙をこらえている自分よりも幼い
少年を見て胸が苦しくなった。被爆者の苦しみや悲しみ、
その家族の気持ちなど、私には到底想像のつくものでは
ないと思った。そして私は修学旅行で大刀洗平和記念館
に行き、特攻隊の話を聞いた。私はこのような悲劇を二
度と繰り返してはいけないと強く思うようになった。私
はこの二回の修学旅行を通して戦争について少し知るこ
とができたが、もし修学旅行がなかったら、戦争につい
て分かっている気であったが実は何も分かっていたなかつた
ということに気付かずには育っていただろう。

また、私は大阪教育大学附属池田中学校に通っている
が、入学した時は警備の厳しさに驚いた。私の通ってい
た小学校の何倍も警備が厳しかったからだ。今まで大阪
教育大学附属小学校で事件が起きたことは知っていた

が、入学するまでは物語を聞いていたみたいで実感がなかった。しかし、警備の厳しさや何かあった時の先生の対応の素早さから、本当にあんな事件があったのだということを実感した。そして私は新聞で当時の事件を経験して唯一残っている附小の校長先生の話を読んだ。その中で特に印象に残っているのは事件を過去の出来事にしてはいけないということだ。そのためには、当時を知っている人から知らない人に語り継いでいかなければならない。これは、戦争においても同じだと私は思う。やはり、「知る」ということは大切だ。しかし、私たちは知るだけではない。知ったことをもとにして、二度と同じような悲劇が起きないようにすることが私たちの使命であると思う。

今の私はこの時代の、この国に生まれ、毎日を平和に送っている。それはとても恵まれていることなのだということに私は気付いた。今までは幸せということに気付かず文句ばかり言って暮らしてきた。しかし、今のこの平和は、ほんの七十年前の戦争による悲劇のうえできたものだ。なんと罰当たりなことを言ってきたのだろうと思う。

「知らない」ということ。それは、とり返しのつかない過ちや悲劇を繰り返す原因にもなり得る。だから私たちは、それがどんなにつらく残酷なことであっても知らなくてはならないのだ。

優 秀 賞

生きる

島根県雲南市立
海潮中学校三年

岩 いわ
田 た
涼 すず
花 か

私が生まれる一年前、兄は天国へ旅立ちました。小学一年生の春、交通事故にあったそうです。そのため私は、兄に会ったこともなければ、話したことも、一緒に笑ったことも、一緒にご飯を食べたこともありません。家族なら、当たり前前にできるようなことを、私は兄と一度もしたことがないのです。兄との思い出は一つもありません。そして、これからも兄との思い出が増えていくことはありません。兄と違って思い浮かぶのは、遺影となった一枚の写真だけ。仏壇の前で手を合わせ、どれだけ声を掛けても、声は返ってきません。私達家族は十六年間、こんなにも寂しい思いを抱えて過ごしてきました

た。十六年間、兄のことを考えなかった日は、一日たりともありません。

私達は、ご飯を食べ、家族や友達と話し、笑って、時にはけんかをしたり、悲しい思いをしたりしながら、毎日を当たり前のように何気なく過ごしています。私は、兄の死から、こんな日々がどれだけ儚いものなのか、どれだけ幸せなことなのか学びました。兄も、もっと生きたかったはずです。やりたいことがあったはずです。約十五日間しか背負うことのできなかったランドセルも、まだまだ背負いたかったはずです。私達家族ももっと生きていてほしかった。もっと一緒にご飯を食べたかった。もっと一緒に笑いたかった。その思いは、今までも、これからも、ずっと変わることはありません。

しかし最近「死」に関するニュースを毎日のように耳にします。登校中の小学生ら、二十名が無差別に殺傷された川崎殺傷事件。中高生らの自殺。このようなニュースを聞いて、命はこんなにも簡単に消えてしまうのか、と思うのと同時に、自分や他人の命を軽く考えてしまう人への怒りや疑問で、頭の中がいっぱいになります。世の中には、なくなってしまうって良い命も、奪ってしまっ

て良い命ありません。兄が、私達家族にとってそうだったように、誰もが欠けることのできない大切な一人なのです。

私達は普段、生活の中で、ほんの小さな困難でも、本当は思っていないけれど「死にたい」と言ってしまうことがあります。自分の気に食わないことがあると、特にネット上などでは簡単に、「死ね」とか「消えろ」などと書き込まれることがあります。そんな言動は、命を軽く考えているからこそ出てくるものではないかと思います。

命がどれだけ尊いものなのか、こうしていつもと変わらない日々を当たり前のように過ごせるということが、どれだけ幸せなことなのか、そして今、生きているということは奇跡であるということを、改めて今、考えてみる必要があると思います。

「二人はお母さんの生きる力なんよ。」

母は、私と妹にこう言ったことがあります。これは、兄は亡くなってしまったけど、その後、私と妹二人が生まれてきたから頑張って生きられるのだということですよ。母は、私達から生きる力を受け取っている分、私た

ちに深い愛情を注ぎ、大切に育ててくれています。そんな今、私はとても幸せです。だから私はこう決めています。

「兄の生きたくても生きられなかった今日を、この一瞬を、大切に一生懸命生きる。そして、父や母に、生きる力を与え続ける。」

きっと誰にでもいるはずですよ。あなたを大切に思ってくれる人が。あなたがいなくなってしまうのは悲しむ人が。だから絶対に他人の命も自分の命も粗末にしたくありません。一人一人の大切な命を守っていききたいです。

この世には、明日を約束された人など一人もいません。だからこそ、生きている「今」を大切に、一生懸命生きていこうと思います。誰もが心の底から笑顔で生きられる世界で。前を向いて。

佳 作

つまらない平和

大阪教育大学附属池田中学校三年

高^{たか}橋^{はし}舞^ま衣^い

一日の終わりに、ああ、今日も一日平和だったなあ、と思う人はこの国に何人いるだろう。ああ、今日もお腹いっぱいご飯を食べられる。幸せだなあ、と感じている人は何人いるんだろう。多くの日本国民は、平和な日常生活に慣れ、殺人事件が起きても、自分は大丈夫だと何の根拠もない自信に満ち、自然災害が起きれば、危険な場所にわざわざ出向き、とりあえず動画を撮り、ニュースで報道される国会の様子は、いつもこんな低レベルな、話し合いですらないことをしているのか、あなた達の高い給料は税金から出ているんだぞと叫びたくなるようなものばかり、メディアも言論の自由だとか表現の自由だと

か言って、大きな情報の中の自分達が報道したいことだけを切り取って報道し、おそらく国民の半分以上がそれを信じ切っている。美味しいもの、便利なもの、安全なものに囲まれて、私達は生きている。

中学三年生になってすぐ、長崎へ修学旅行に行った。とても楽しく幸せな時間だった。ただ、太刀洗平和記念館・長崎原爆資料館では違った。小学校の修学旅行で広島ではなく静岡に行ったため、戦争、特に原爆関連のところへ行くのは初めてだった。

ショックだった。こんなにも多くの人の命が、人生が、消えたのか。こんなにも多くの人が、体の痛み、のどの乾きに、大切な人を失う悲しみに、苦しめられたのか。『もう一つの太陽』と呼ばれる程、熱く大きな殺人兵器を、人間は作ることができたのか。瓶が溶けるなんて聞いたことがない。米って炭化とかするものなのか。想像もできない。瞬きができなかった。目を離しては、逸らしてはいけないと思った。カメラのシャッターを押す手も、いつの間にか止まっていた。全てが衝撃だった。事前学習で「さとうきび畑の唄」という映画を見た。登場人物の笑顔が、命がどんどん消えていって、

すごく可哀想で、随所で涙が頬を伝った。だが平和記念館・原爆資料館で、私が「可哀想」という感情を抱くことはなかった。怖かった。ただただ怖かった。「授業」として、話を聞いたり、文章を読んだり、映像を見たりするのは違う、学校では味わえないリアルな世界が、そこにはあった。戦争なんて、もう二度としてはならない。こんな痛い、苦しい、悲しい体験、もう誰もしなくていい、してほしくない、したくない、そう思った。でも、私のように、見て、読んで聞いて、触って「知る」ことは絶対に必要だとも感じた。知ることをしなければ、何も出来ないから。そして私が痛感したのは「忘れる」ことの軽さ。原爆資料館を出てすぐ、バスの中は笑い声に満ちていた。人間の脳の残酷さ。「マイナスな記憶」は「楽しい現在」に決して勝てない。次から次へと塗りかえられていく。でも、それでも、「思い出す」ことはできる。「伝える」こともきつとできる。少なくとも私は忘れたくない。あの一時間にも満たない時間に、知ったこと。伝えたい。やりたいこともできずに、痛みすら感じずに亡くなった人、水を探し求めて、川で亡くなった人、全身に火傷を負い、痛みにもだえ苦しみが

ら亡くなった人、爆風と熱線で体の一部を失った人、放射線による後遺症に今も苦しんでいる人がいること。私には、その義務がある。

平和とは何か。「争いがなく、笑顔と笑い声で満ちていること」で合っていると思う。これは決して偽善などではない。本心だ。ただ、そこに「停滞」の二文字が加わったとき、その「平和」はとてもつまらない、くだらないものに成り下がってしまうこと、私は知っている。

佳 作

平和へのキツカケ

長崎県

長崎市立淵中学校一年

原 はら 田 だ 晋之介 しんのすけ

ぼくの曾祖父は、ヒロシマとナガサキで被爆した二重被爆者です。ぼくは、曾祖父のひ孫なので被爆四世になります。

ぼくの母は、被爆三世で語り部活動をしています。曾祖父の体験したことを話したり、被爆者の方が作ってくれた「二重被爆」という紙芝居を使って県外の人たちなどに平和の大切さを伝えています。幼いときは、一緒に聞いていつて母の話を聞いていました。その時は、語り部活動はみんなしているのだと思っていました。

小学校に入学して戦争や原爆のことを学習し、被爆者の被爆体験を聞くことで気付いたのは、たくさんの人が

平和を伝える活動をしていけば、核兵器を人々に使ったらどうなるかを知り、学ぶキツカケが増えていくのだと思いました。

八月九日は長崎に原爆が投下された日です。夏休みでも、学校に登校して黙とうをささげます。亡くなった方に目をとじてしずかにいのります。ぼくは、その時間はものすごく悲しくなります。この一瞬で多くの人々が亡くなったと考えると恐ろしいです。また、その亡くなった人が家族や友達だったら…そう考えるとものすごく悲しいです。六年生の時、広島に行き、黙とうしたことがあります。黙とうしたあと少し泣きそうになりました。この地で七万人の人々が亡くなっているのです。そのときぼくは、母のようにたくさんの人へ語りつこうと決心しました。

ある日、母が、

「晋之介も、紙芝居読んでみない？」

と聞かれました。ぼくもやってみたいと思っていたのであっさりと

「うん。読んでみたい。」

と答えました。けれど少し心の中で言いまちがえたりた

どたどしく読んでしまったらどうしようという不安がありました。なので、噛みやすい所を何度も読んだり、学校で友達に聞いてもらったりしました。

そして本番の日、ものすごく緊張しましたが、深呼吸をして落ち着いて読みました。少し噛んだ所もありましたが、終わったあと、たくさんの人が拍手をしてくれたのでうれしかったです。読み終わったあと、友達が、「ひいおじいちゃん、こんな体験をしてでも語り継ぐなんてすごいね。」

と言っていました。母は、

「すごいできてるじゃん！お母さんが語り部活動ができなくなったなら、晋之介にバトンタッチするからね。」

と言い少しうれしそうな顔をしていました。ぼくは、母のようにいろんな人たちにこのような話をして、平和のことにについて考えるキッカケを曾祖父のように作れるのがうれしかったです。

曾祖父は、世界に向けて核兵器の恐ろしさを発信して世界の人々に平和の大切さを考えるキッカケを作りました。ぼくは、被爆者ではないのですが、その曾祖父の思いを引き継いで長崎から多くの人に曾祖父の被爆体験を

語り、平和の大切さを考えるキッカケを作りたいです。

最優秀賞

誰かを想って

東洋英和女学院高等部三年

中山純花
なか やま すみ か

おむすび、おにぎり、にぎりめし。どれも同じご飯を握ったものだ。曾祖母は必ず「おむすび」と呼んだ。

「お腹空いてないかい。おむすび握るか。」

そう私に声を掛けて握ってくれる曾祖母のおむすびは、手に取っても崩れないのに、口に入れると優しくホロツと流れ落ちる。なんでこんなに上手に握れるのか。その私の問い掛けに、あたたかくも少し寂し気に、今までたくさん握ってきたからねと、曾祖母は静かに語った。

東京大空襲の戦火は、いま私が暮らしている埼玉県の浦和から見えたこと。不気味に赤くゆらゆらと空を染めた光景は何年経っても忘れることはできないと。曾祖

母は、その空を眺め、できるだけの白米をかき集めご飯を炊きおむすびをたくさん握ったこと。これから戦火を逃れた人がたくさん避難してくる。その人々の苦しみを少しでも和らげるために、優しく優しく。

その人を想いその人の為に握る白米は、人と人とを結ぶ白いツヤツヤの宝物。だから、「お結美。」そう、優しい声で教えてくれた曾祖母。

かつては日本も戦争をしていたんだ。平和な時代に生まれ、平和な時代にしか過ごしていない私にとって、戦争とは完全に過去。教科書で知る出来事。でも、確かにここであつたことなんだ。

日本は戦後急成長し、高度経済成長期を経て、いま更に進んだAIの時代へと変化した。生活が豊かになる一方で、人と人とのコミュニケーションの希薄が如実化するにつれ、私は亡き曾祖母の握ってくれたおむすびの味を思い出す日々が続いていた。

そんな時に聞いた伯母のカンボジアの旅話し。貧しさの中にでも、そこに暮らす人々のエネルギーに満ち溢れ助け合う姿は、戦後の日本のようだ。私は、心を掻きむしられ何かに追い立てられるかのように、カンボジア

の地に降り立った。

孤児院では、戦争で孤児になった子供たちの生活場所だけではなく、子供を孤児院に置くことで、外国語や就労につながる勉強を学ぶ事ができると言う。両親は他国で働きながら技術を学びいつの日にか自国の産業発展の担い手にと精を出す者、開拓のために地雷の撤去に日々奮闘する者。汗水たらし働き、皆で分け合い食べる食事。水上のバラックに暮らす少女は、貧しい生活を強いられ、この国に生まれてこなければと思う事もあったが、この国に生まれたからこそ互いのことを想い頑張れることができるかと語ってくれた。彼女の生き様をみると、自ら被爆しながらも多くの人々を救済した永井隆博士の人生が重なる。次世代への改革を皆で協力するカンボジアの人々の姿は、国は違えど「己の如く人を愛せよ」と謳った博士の信念そのものが、そこにはあった。

自分の豊かさばかりを追い求め、他者への気遣いがなくなつた今の日本は、先進国として果たして誇れる存在なのか。恥ずかしい。今後の日本を担う私たちの改革は、前進することだけではなく、横の繋がりの強化ではないか。

青い空、白い雲。きらめく太陽は、世界のどの場所からでも同じ景色として見る事ができる。ただ、そんな空を明日への希望として見続けることができるかは、自分次第だ。

その少女と誓った。

互いに苦しい時は空を見上げて頑張ろうと。そして、再会の時を。

白くツヤツヤに輝く炊きたての白米。手を濡らし、少し多めの塩を手の平に。熱いのを我慢して、おむすびを握る。このおむすびを握る時は：私にとっての特別な時間。

優 秀 賞

如己ー私の核廃絶ー

盈進中学高等学校二年

うまやはら
馬屋原 瑠 美

「Small is beautiful」 「力の文明から愛の文明に」

これは、広島県原爆被害者団体協議会（広島被団協）初代理事長で、核実験に抗議し、生涯で約五百回も広島平和公園原爆慰霊碑前に座り込みを続けた故・森瀧市郎先生の哲学だ。同じく尊敬する永井隆先生の「己の如く隣人を愛せよ」と同列に、私が核兵器廃絶の活動をするなかで、最も大切に行っていることばだ。

私はいま、森瀧先生の遺志を継ぎ、現在、広島被団協理事長を務める坪井直先生の半生を記した冊子を英訳し、世界に発信する作業を地道に続けている。坪井先生は、オバマ前米国大統領が広島を訪れた時、最初に握手

した被爆者でもある。冊子は『にんげん坪井直魂の叫び。』サブタイトルは、坪井先生の口癖の『Never give up!』である。私が所属するクラブの先輩方が二〇一六年の三月、二日間にわたって聞き取りをし、文字化した冊子だ。翌年末に完成させ、広島平和資料館などに寄贈した。

私はクラブの部長として、信頼するクラブの仲間たちと、その冊子を、京都外国語大学のNET-GTAS（被爆証言の世界化ネットワーク）の力も借りて英訳している。今秋、英語版冊子の発刊と、webでの世界発信が実現しそうだ。

作業は様々な困難にぶつかる。たとえば、私たちの英訳をネイティブの先生に添削してもらうと、どの単語を用いるかでよく立ち止まる。使用する単語によって、伝えたい内容が変わるからだ。それをネイティブの先生に理解してもらうのにも時間がかかる。同じような意味を持つ単語でも、より適切な選択がとても難しい。また、丁寧に訳しすぎると一文が長く、複雑になってしまうため、単語数を最小限に抑えて、なお分かりやすく訳すことが求められる。つまり、私たちの訳が、坪井先生の壮絶かつ尊い半生の価値を下げてはならないので、私たち

はいつも神経を尖らせ、日々、自分自身と厳しく向き合っているのだ。

しかし、どんなに困難であろうとも、私をつき動かすのは、紛れもなく、永井先生や森瀧先生、坪井先生ら被爆者の反核運動の軌跡と「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない」という、人間愛に裏打ちされ、復讐や敵対を超えた素朴で崇高な平和を希求する思想だ。彼らの生きざまを象徴する前述のことばは、私をいつも勇気付ける。「核廃絶は被爆者の苦しみが原点」（森瀧市郎先生の哲学）である。被爆者の証言を聞き、記録し、記憶し、継承して発信していくことこそ、核兵器廃絶という人類の悲願達成のために重要であり、それは被爆地ヒロシマに生まれ、被爆国日本に育った私の使命だと信じる。

“Don't wait,younger generation”（あなたたち若者こそ行動を起こすのよ）。核兵器禁止条約の国連採択の際に議長だったホワイト大使のことばだ。私は、昨春「ユース非核特使」としてジュネーブ欧州国連本部に派遣され、大使と面会した。私は大使に、私が中学生の時から継続している世界中に核兵器禁止条約の締結を求める署名を

手渡し、ピースリレイヤーとしての決意を語った。その時に、ホワイト大使が涙を流して私にそう、おっしゃった。

私の祖父は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で被爆体験記の朗読ボランティアとして活動している。祖父は語る。「核廃絶という人類の理想を追い求めて活動する孫（私）たち若者の活動は希望だ。」森瀧市郎先生の娘の森瀧春子さんが、署名活動で街頭に立つ私たちに「あなたたちの活動が私の希望です。」と言ってくださったことがあるが、それと合致する。いま私は、そんな祖父や春子さんの「希望」であることを誇りとして、胸に刻む。「如己。」自分のように他者を愛する。それを前提に、多様性を尊重し、互いの違いを認め、共通点を見出す。そして、共通価値を創造し、共通目標に向け、ひとりひとりが努力する。その小さな日常の積み重ねこそ、巨大な核に勝てる営みだと私は信じる。

佳 作

真の平和とは

沖縄県立首里高等学校三年

金 城 琉 夏
きん じょう りゅう か

沖縄に住んでいる私達は沖縄戦によって沢山の方々が亡くなったことを知っている。七十四年前の沖縄で人がでなくなるような戦いがあつた過去を知らない人はいない。幼かった祖父もかつて銃口を向けられた。その恐怖を語ってくれた。その話をする度に私に言う。「命を大切にしなさい。」と。体験者が高齢になつていゝ今、その貴重な言葉を聞き後世へと伝える役目が私達にはあるのだ。

しかし、「命を大切にしてほしい。」と伝える人々の言葉は私達は忘れてゐるのではないかと思う。命を軽く見ているのではないかと。沖縄県の十五歳から十九歳の死

因で一位に来るのは不慮の事故、そして二位には自殺とある。二十代から、三十代にかけての死因も一位には自殺なのだ。この事実を知つたのは、慰霊の日が終わつてすぐのことだつた。戦争中、懸命に生きようとしていた人々の話の後に死因の一位に、自殺が占めてゐることを知つた私は悲しさでいっぱいになつた。自殺する者を悪いと言つてゐるわけではない。なぜ自殺する人がこんなに出る社会なのかが問題なのだ。今の世の中にはたくさん問題がある。大人の世でも子供の世でも繰り返されるイジメ、心ない言葉や行動、利己的な考えの人々。このような社会に苦しめられ、限界まで追い詰められた人が自ら命を断つ選択をしてしまふ今の環境に問題があるのだ。死因の一位に自殺が来てしまふ世の中のどこが平和だと言えるのか。特に沖縄県民は分かるはずだ。命がどれほど重いもので、あなたの命までいくつの命を繋いで来たのかを。沖縄戦でたくさんの方が殺し合い、民間の人が大勢犠牲となつた事。年齢も性別も関係なく、二十余りの命がこの島で奪われてゐた事。体験者の話を聞き、二度と戦争は起こさないようにしよう、命を大切にしようとする誰もが誓うはずだ。なぜ自殺によって自ら

命を断つ行為をするのだろう。これは「平和」に対する無関心を表しているのではないか。

平和な世の中が当たり前、戦争があつた事を歴史のページと捉えている若者をたとえる言葉がある。「平和ボケ」だ。たしかにそうだ。平和な今を生きている私達にとって今が当たり前の世の中なのだ。生きていて、一日三食食べ、学校へ行き、将来のことを考えられる今が永久に続いていくような氣になっている。つまり、この言葉は戦争の悲惨さを忘れ、時流に流される人々に対する揶揄の言葉なのだ。「平和だ。」と言いながら、「生きる」ことに苦しむ人がいる。なんと矛盾する世の中なのか。戦争体験者がどんなに平和の尊さを訴えても、平和な世の中を生きる現代人には、その価値が分からず、自ら命を断つ悲しい社会になってしまっている。「戦争をくり返してはいけない。」誰もが思っていることだ。しかし、現代人の関心はそこに向いていない。どうしたら生きる事に喜びを感じ、戦争を起こさない真の平和を築くことが出来るのだろうか。これは人類にとって永久に答えの見えない課題のような氣がしてくる。だからこそ答えを求め続けなければならぬと私は思う。「真の平和

とは何か。」私達の周りには苦しみ、追いつめられて自ら命を断つ人がいる。だから、その行為をさせている環境を変えなければならない。

そして沖縄に生まれ育つた私達には使命がある。戦争の悲惨さと、命の大切さについて後生に伝えること。現代の風潮を未来へ伝染させるのではなく、命の尊さを訴え、平和への道を求め続ける。人の痛みを知り、共に寄り添いながら生きよう。真の平和を創ろう。私達が望む平和は私達の手で創るしかないのだ。

佳 作

平和とは

島根県立三刀屋高等学校二年

山 やま
口 ぐち
俊 とし
樹 き

「ばかにするな。」僕はある問題に対し、このように感じてしまうのだ。それは、障がい者に対しての人々の対応である。僕は、障がいを持つ家族の間に生まれた。父母ともに足に障がいを持ち、母は外出する際は、車いすでの移動になっている。姉はダウン症という障がいを持つっている。僕はこの家族と生活をしているからこそ、障がい者とその他の人々との大きな壁を感じるのだ。例えば、僕が父から聞いた話ではあるが、父は足が不自由なため歩き方に違和感を感じるが、不思議に思うならまだしも、笑われることがあったそうだ。また、障がい者の行動に対し、笑ったりばかにしたりする若者も多く僕

は見てきた。僕はこれらのことに苛立ち、そして怒りが込み上げてくるのだ。果たしてこれが平和と言えるのか、いや、言えないだろう。どうすれば、障がい者に対しての世間一般の見方が変わり、優しく接してくれるのかを僕は考えた。

それは、人々が障がいのことについて理解をしているかどうかだ。人々にとっては当たり前のことも、障がい者にとっては当たり前でないことがある。体が自由に動かせない、思うようにしゃべれないなど生活する上で大変なことは多くあるのだ。人々は、何でそれができないの？などと自分たちより下に見ていると僕は思う。だからこそ、人々が当たり前に思っていることにもっと感謝をしてほしい。その心があれば、障がい者に寄り添うことができるのだ。人間誰しも同じ体、心を持っているわけではないのだからこそ、それぞれの個性を大事にする必要がある、尊重していくべきだ。最近のニュースで、城の改築をめぐり、安倍首相の発言の中に、「エレベーターをつけたのは間違いだった。」という発言があった。これは、城をそのままの形で復元をしたいという意味での言葉ではあったものの、障がいを持つ人にとっては、

不快に感じたことだろう。車いすの人はエレベーターがなければ、城に上ることは困難になってしまう。たしかに、文化を継承したいという気持ちがあるのは当然だと思うが、全てにおいてその考えを尊重され続けられれば、様々な観光スポットや施設へと行くにも行けなくなってしまう。そのことでさらに人々と差が広がってしまうのではないかと思う。昔のものも大事にするのは当然だが、今あるものこそ大事にするべきだと僕は思う。文化を継承しつつ、バリアフリー化を進め、全ての人が参加できる社会であってほしいのだ。

「如己愛人」己の如く人を愛せよ。この永井隆博士の言葉はとて素晴らしい言葉だと思う。障がいを持つ人に対しても優しい心を持ち、自分のことのように愛してほしいのだ。困っていたり、悩んでいたたりすれば、優しく声をかけて互いに助け合っていくべきである。

僕はこの家族の間に生まれてきてよかったと思っている。両親には、「本当にこの家に生まれてきてよかったの？」と聞かれることもある。しかし、この家族の一員になったことで、僕は様々な部分で大きく成長できたと思っっている。誰にでも優しく接することの大切さ、あり

がたさ、助け合いの心などたくさんある。この障がいをもつ、父、母、姉をこれからも愛し続けていきたい。そして、この世界が誰しも平等で楽しく、愛であふれた「平和」な世界になるように願っている。小さなことでいいから、助けの手、優しさの手をさしのべてほしい。それが平和への近道である。愛とやさしさであふれる世界へと。

最優秀賞

平和のたすき

東京都

こまつぎき
小松崎

じゅん
潤

「おっかちゃんは東京五輪の開会式を見て、テレビの前で泣いていた。」

そう話すのは祖母である。祖母は昭和六年生まれの戦争経験者だ。僕が高校の歴史学習のとき、僕の高校に出向いてこんな話をした。

それは一九四二年三月にビルマで長兄が戦死したときのエピソードだった。ある日届いた戦死公報。だけど祖母の母親は悲しむどころか気丈に振る舞った。

「おめでとうございます。」

「ありがとうございます。」

こうした近所の人とのやり取りに、祖母は違和感を覚

えたという。なんで家族が死んだというのに。めでたいことなのか、感謝することなのか。おかしいやろ。すると横で母が、「ほら、ミツ子。ありがとうございますでしょ。」と頭を下げさせた。だけど頭を押さえつけるその手は震えていた。その強さで祖母は感じとったのだ。母親のどこにもぶつけようもない苦しみを。いわゆる名誉の死は悲しむことは許されず、堂々とふるまうことが求められた。母親が人前で泣かなかった理由もここにあった。泣かなかったのではなく、泣いてはならなかったのだ。だけど近所の人が帰るなり、母親は遺影のある部屋へと走り込み、畳に身を投げて号泣した。こうやって抑えていた哀しみを爆発させたのだった。

この講演中、祖母はある質問に言葉を詰まらせた。「お父さんはどうしたんですか。」

祖母は何度もマイクに向かうが、なかなか言葉が出ない。会場が「まずい」という空気に包まれた。

「あ、やっぱりいいです。すみません。」

「自殺したんです。戦争神経症でした。戦地で私くらいの子どもを殺したと言っていました。その子がいつもそこにいると言って暴れていました。」

祖母は絞り出すように言ったが、それきりもう言葉が続かなかった。きつと当時を思い出したのだろう。祖母は父親との再会を心待ちにしていた。しかしやっと帰ってきた父親の姿は再会を喜ぶことなく、祖母を抱きしめることもなかった。いつだって部屋の隅っこで震え、背中を丸め苦しんでいた。人を殺めた記憶と生きることが死ぬほど辛かったのだ。自殺はそれを証明した。

「じゃあ平和になったと感じたのはいつですか。」

東京五輪、と祖母は答えた。そこにはかつて戦争で血と涙を流した日本人が、平和に向けて一歩踏み出す強さが垣間見れたと言う。

戦後七十四年。もうすぐ二度めの東京五輪。果たして日本は平和になったのか。令和という新しい時代を迎え、ふと考えた。真っ先に浮かんでは職場に入ってきたフィリピン人と中国人のことだった。高齢化の日本は今、深刻な介護士不足の問題を抱えている。僕の勤める老人ホームでも外国人介護士の受け入れは、もはや必要不可欠だった。

だが、言葉も文化も違う彼らにとって、日本で働くということは生易しいことではない。それでも彼らは懸命

に学び、今や職場になくてもならない存在だ。

しかし、フィリピンと言えば、第二次世界大戦で日本がフィリピン全土を制圧した過去がある。中国と言えば、一九三一年から日本が降伏するまでの十四年間で何百万人も中国人が亡くなった経緯がある。

だけどあれから七十四年の時を経て、日本の介護は、いま国を越えて、言葉の壁を越えて、人と人が助け合っている。

永井隆博士の言う通り、愛の世界に敵はいないのだ。我々はひとつの空でつながっているように、国境を外してみれば心でつながっているのだと思う。

だけど、そんな平和な世だって、戦争で落としてきた命の上に成り立っていることを忘れてはならない。今日自分があるのも、ほっとするような日常があるのも、すべて誰かが犠牲になり、涙を流し、前にすすむエネルギーに換えてきたおかげなのだ。

いま、日本は戦争のない平和な国である。そんな平和があるのも、戦争で流した涙の記憶をつないできたからこそである。

どうか、東京二〇二〇が「平」成から、令「和」への平和のたすきをつなぐきっかけとなって欲しいと願う。

優 秀 賞

私の願い

埼玉県

吉 澤 恵 子
よし ざわ けい こ

「もうやめてよ、そんな話！」

それは私が小学生の頃のことです。社会の宿題で太平洋戦争の勉強をしていた時、近くで見ていた祖母が戦争の話聞かせてくれました。実体験を聞いたのはその時が初めてで、教科書に載っているそれより遥かに鮮明でいて凄惨で、私は生まれて初めて戦慄を覚えました。あまりの衝撃に耐えられなくなった私は話を続けようとする祖母を制止し、頭の中で固く蓋をして、忘れよう忘れようと思いました。それ以来祖母は私の前で戦争の話をしなくなりしました。それから二十年が経ち、ある日何気なく電車に乗っていると、

「外交で失敗しても戦争すればいいんだよ」

という会話が聞こえてきました。その瞬間。私の根底に眠っていたものが揺れ始め、閉じたはずの蓋が音を立ててはじけ飛びました。それは「いつかまたあの恐怖に満ちた戦争が始まるのではないか」という不安。祖父や祖母のような、実際に戦争の時代を生きた人たちは高齢になり、時が経てば本当の戦争を知る人がいなくなってしまう。そうしたらまた、歴史を繰り返してしまうのではないか。私は不妊治療の末授かった娘を抱いて、祖母に会いに行きました。祖母は、可愛いねえと娘の頭を撫でてくれて、

「実はおばちゃんにも歳の離れた妹がいたのだけど、戦争の時にね…」

と言いかけて、はっとして口をつぐみました。そんな祖母に私は、

「今まで避けていてごめんなさい。今日はちゃんと聞かせて欲しい、戦争のこと」

と頼むと、少しの沈黙の後、祖母は話してくれました。粗悪な肥料を使った農産物の影響で、回虫というのだそうです。幼い妹のお腹に虫が住みついてしまったそう

です。現代なら簡単な虫下しの薬で治るのに、戦争が起きていた為薬が手に入らず苦しみ続けていた妹。食べ物を食べると腹の中で虫が成長し、死期を早めてしまうのでご飯をあげることができず、お腹がすいて「まんま、まんま」と泣きながら食卓の周りを食べ物を探して徘徊し、餓死していったのです。まだ二歳だった妹の遺体を焼いて、残った少しの骨はリュックに詰めて。ある時敵国の兵士たちが来て、そこら一帯の住人に、移動するよう命じました。それは何日も歩き続ける終わりの見えない旅路で、一度でも転んだりしようものならその場で撃たれ殺されてしまうので、皆一列になって足の間をくぐりながら必死に歩いていった最中に。目の前を歩く兄弟が背負ったリュックの中から、妹の骨がぶつかり合うカランカランともカシヤンカシヤンともいえない音が響いて、今も耳から離れないのです。その道中では足手まといになるからか、容赦なく銃弾を浴びた赤ん坊が血を吐き苦しみ、そんな我が子を早く楽にしようと、涙を流しながら母親自ら赤ん坊の首に手をかけ、息の根を止める姿も見たのだそうです。私は祖母の話に血の気が引き、体の奥底からガタガタと震えるのを感じまし

た。やっとの思いで授かり、陣痛を乗り越え産んだ愛おしい娘。その娘を苦しみから解放するため手にかけるなど、想像するだけでとても正気ではいられない。今まで自分が辛くなるから、悲しくなるから聞きたくないと逃げてきたものの正体に気付き、背筋が凍りました。耳を塞ぎ目を閉じ、忘れたふりをする。それこそが危険なことだったのです。すうすうと寝息をたてている腕の中のこの小さな命に、そしてその子どもたち、そのまた子どもたち、未来を生きる全ての子どもたちに、そんな思いをさせてはいけない。繰り返してはいけない。数十年後には日本から戦争を経験した人たちはいなくなり、世界からいづか戦争を知る人がいなくなる幸せな時代が来るかもしれません。戦争を知らない未来の世界は、とても安らかで、とても恐ろしい。風化させてはならない、忘れてはならない。その為に私たちは次の世代に語り継いでいくべきなのです。大切な存在の平穏を願って。祖母の持つ悲しい記憶を分けてもらって、私は少し前に進むことができました。失われた尊い命たちに顔向けができるよう、戦争は二度と起こさないと、胸を張って生きたいのです。

もしもし、未来の娘や孫へ。あなたの世界は優しいですか。誰もが笑って過ごせていますか。たとえ言葉が通じなくても心を通わせ、争いを解決できていますか。そんな世界を夢に見て、あなたが理解できるようになったら祖母の話を聞かせます。こわくなったら抱きしめます。この願いが届くようにと、私はずっと、祈っています。

佳 作

なれし故郷を放たれて

山梨県

入 倉 文 子
いり くら あや こ

三月末の日曜日、私は知人を見舞うために横浜に行き、帰りに市内の観光名所「赤レンガ倉庫」を訪れた。多くの人で賑わう倉庫群を見終え、海の見える方に歩いて行くと、白いドーム型の建物が見えた。看板に「海上保安資料館、見学自由」とある。何が展示されているのか、予備知識もないままドアを開けた。

明るい館内に人影はなく、ひっそりしていた。建物の中央は吹き抜けになっており、見上げるように背の高い緑色の船が一隻、展示されている。船の周囲には階段が巡らされ、登りながら船体を間近に見ることが出来る。パンフレットには次のように記されている。

平成十三年、九州の海に現れたその船は、巡視船の停止命令を無視して逃走、銃撃戦の末に自爆し、乗組員と共に海に沈んだ。翌年、船体が引き揚げられ、様々な証拠物から北朝鮮の工作船と断定された。多くの重大犯罪に関わっていた疑いが濃いという。

近くでよく見ると、緑色の船体は赤茶色に錆つき、銃撃戦の弾痕が生々しい。様々な展示物から、海の安全を守る保安官の苦勞が偲ばれた。私は初めて見る工作船の異様な雰囲気、衝撃を受け、恐怖を覚えた。そして、北朝鮮に拉致された横田めぐみさんのことを思った。

めぐみさんは、これと同じような船で連れ去られたのだろうか。母・早紀江さんの手記『めぐみ、お母さんがきつと助けてあげる』の中に、元拉致工作員の証言がある。

「めぐみさんは真つ暗な船庫に閉じ込められ『お母さん、お母さん』と泣き叫びながら壁をひっかいたので、港に着いた時には爪がはがれかけ、両手は血だらけだった」

余りに痛ましく、忘れられない場面だ。

十五年ほど前、私は当時勤務していた中学校の図書室

でこの手記に出会った。読み進むにつれて、娘を奪われた母親の悲しみが胸に迫り、それまで遠い世界の出来事のように感じていた拉致問題に目を開かされた。生徒たちには本を紹介したところ、ある女生徒はこの問題に関心を持ち、夏休みの自由研究で取り上げた。秋の初め、彼女は一夏かけてまとめ上げた研究ノートを持って、東京の「救う会」の集会に行った。横田夫妻は熱心にノートを読んで、とても喜んでくれたという。そして、後日、彼女の元に手書きの御礼状が届いた。彼女が見せてくれた手紙の文面から、夫妻の誠実で温かな人柄が伝わって来て、胸を打たれた。

中学一年生だっためぐみさんが姿を消したのは一九七七年の秋。最初は泣き暮らしていたが、朝鮮語を覚えれば日本に帰してやると言い含められ、けなげに勉強していたという。「めぐみさん生存」の情報がもたらされたのは二十年後の九七年のこと。少女は囚われたまま青春時代を迎え、妻となり母となった。彼の地に生きた証は確かに残されている。しかし、再会の希望はことごとく打ち碎かれ、四〇年以上が過ぎた今、消息は不明だ。

日本政府が拉致被害者と認定した人はめぐみさんを含めて十七名。そのうち帰国出来たのは曽我ひとみさんたち五名とその家族のみ。また、民間の特定失踪者問題調査会によれば、拉致被害の疑いが濃厚な人たちは七十名以上に及ぶという。この四〇年ほどの歳月を振り返ると、私自身の人生にも様々な波瀾や思いがけない苦労もあった。しかし、拉致被害者やその家族の苦悩を思うとき、平凡な日常がどんなに恵まれたものか気付かされる。平和とは、愛する人たちとの暮らしが誰からも脅かされないこと。そう強く思う。

私の耳に、いつかテレビから流れてきた、めぐみさんの澄んだ歌声が蘇る。六年生の時にクラスで合唱した「流浪の民」のテープが保存されており、それが放送されたのだ。彼女が独唱した一節はその後の悲劇と重なる。

なれし故郷を放たれて 夢に樂土求めたり

「放たれる」とは意思に関係なく遠くに追いやられること。何の落ち度もないのに「故郷を放たれた」めぐみさんは、愛する人々が待つ故国に夢の中でしか帰ることが出来ない。こんな非人道的なことがいつまで続くのかと思うと胸が苦しくなる。

家族会の活動に半生を献げた横田滋さんは衰弱して病床にある。再会を待ちわびながら、何人もの親たちが亡くなった。もう、本当に時間がないのだ。拉致問題解決を進めるには、世論の後押しが不可欠だ。私に出来ることは周りの若い人達にこの事件を伝え、関心を持つってもらうこと。そして、救う会のホームページにあるように、被害者救済を要望する葉書を首相に送り続けることだ。

一刻も早く道が開けますように。全ての拉致被害者が笑顔で帰国し、肉親と再会を果たせますように。そう祈りつつ、海上保安資料館をあとにした。

佳作

平和への道

神奈川県

田^た村^{むら}智^{とも}子^こ

「私の理想は平和です。将来は、ジャーナリストか教師になって、平和について訴えて行きたいです。」

三十五年前、四谷にある大学の入学試験でこう論じた。テーマは「私の理想」。

大韓航空機撃墜事件、ソ連のアフガニスタン侵攻など、東西の緊張が高まっていた八十年代前半、核戦争勃発の可能性は、戦争を放棄した日本に住む高校生にも、差し迫った脅威であった。

「アメリカの小学生の女の子が、ゴルバチョフに手紙を書いたそうです。どうか、その思いを受け入れて欲しいです。」

ソ連の最高権力者がそんなことするものか、と冷めた心を持ちながらも、願いを込めて綴った。

そして五年後、冷戦終結の「奇跡」が起きる。

私の平和への思い、それは小学校時代にさかのぼる。九州の片田舎にある母校では、夏休み中も、八月六日は登校日であった。盛夏のさなか、汗をふきふき通学し、あの日の広島空に思いを馳せ、犠牲者を悼んだ。

六年生になると、修学旅行で長崎を訪れた。初めての宿泊行事にはしゃいでいた小学生も、原爆資料館を出た後は、みな無言であった。高度経済成長期に生まれ育った私たちの、「戦争の原体験」はそこにあったと言っても過言でないだろう。

成人してからは、沖縄、知覧など戦争の足跡を辿った。中でもアウシュヴィッツは、大虐殺の場ということ、心して赴いたが、広々とした草原にバラックの並ぶビルケナウ収容所は、意外にも「聖地」の趣があった。訪問時は戦後六十年目にあたり、その間、世界中の人々が彼の地を巡礼し、悲劇の場所が聖化されていたのではないかと考えた。

大学入試で誓った平和の理想。希望通り教職に就き、

倫理や現代社会の授業を通して自分の経験や思想を語ってきた。しかし、世界を見ると、今もテロや虐殺が絶えない。教壇に立って三十年近くなるが、何を生徒に伝えることができたのだろうか。

そんな中、担当学年の修学旅行先が長崎に決まり、永井博士について深く知る機会が巡ってきた。そのころ他界した父が長崎医大出身で、博士ともささやかな交流があったこともあり、博士を平和学習の柱とすることは、半ば自分の使命のようにも思えた。

一連の著作を読み、「聖人」と呼ばれた博士の人間くさい人柄に魅入り、極限状況でも、ユーモアを交えて自己を客観視できる知力、精神力に圧倒された。そして、博士が「己の如く人を愛せ」と説き、妻を死に至らしめ、自身の病に追い打ちをかけたアメリカを、決して責めなかったことを私は知る。

そこで頭をよぎるのは、アウシュヴィッツを始めとする強制収容所を生き延びた、『夜と霧』の著書で有名な、オーストリアの精神科医フランクである。永井博士を思わせる、人間的温かさ「遊び」心を持つ彼もまた、家族を奪われ、人権を蹂躪されながら、一言もナチスを

告発していない。

何が二人にこのような超人的生き方を可能ならしめたのか。

一つの答えは、やはり信仰にあるだろう。共に大いなる存在を仰ぐ者として、絶対者の創造した世界や人間への受け入れがあったように感じる。永井博士は、カトリック信者の多い浦上に原子爆弾が落とされたことさえ、「神の摂理」と捉えたそうだが、人間を超えた者への信頼が、豊かな諦念と世界への「許し」をもたらしたのではないか。

平和な世界を目指す時、戦いや暴力の悲惨さを深く心に刻みつけると同時に、「許し」についても学んでいかなければならぬと思う。それは容易なことではないが、「憎しみ」が人生に何の益ももたらさず、報復はさらなる報復を産み出すものでしかないことを思い知るにつけ、どんなに辛く苦しくても、「愛する」方へ、勇気を持って踏み出さなければならない、そう私は感じるのだ。

「許し」への道は平和への道であり、教育や報道に携わる者は、現実を見つめ、「過ちは二度と起こさない」

という決然とした意志を持つと共に、和解の道を示していく責任がある。

医学や科学の犠牲になりながらも、人類の発展を願って止まなかった永井博士が遺した「平和を」の言葉は、簡単に相争ってしまう私たちに、重いメッセージを残している。

「私の理想は平和です。平和のために、お互いを受け入れ、許し合っていきましょう。」今の私は、こう主張する。自分を含めた不完全な人間や世界への祈りが、新たな「奇跡」をもたらすであろうことを信じて。

第二十九回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに受賞結果

【小学生低学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
大恵 朱実	せんそうをわすれない	兵庫県	西宮市立南甲子園小学校二年	最優秀賞
石飛里 花	「かわりばんこ」ってすてきだな	島根県	雲南市立掛合小学校三年	優秀賞
加藤 想大	命のバトン	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	佳作
田中 悠翔	いっぱいやさしくするよ	島根県	雲南市立三刀屋小学校一年	佳作
内田 俊佑	ぼくが考える平和とは	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	
片寄 阿蓮	人を大切にする	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	
名原 緋鞠	命は大事	島根県	雲南市立鍋山小学校三年	

【小学生高学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
渡邊 羽弥	私にもできるボランティア	島根県	雲南市立三刀屋小学校四年	最優秀賞
大坂 優空	あこがれの母	島根県	雲南市立西日登小学校六年	優秀賞
谷戸 誉	一つの命のすばらしさ	島根県	雲南市立鍋山小学校五年	佳作

【中学生の部】

氏 名	テ ー マ	都道府県名	学 校 名	賞 名
林 瑞 季	知らないという罪	大阪府	大阪教育大学附属池田中学校三年	最優秀賞
岩 田 涼 花	生きる	島根県	雲南市立海潮中学校三年	優秀賞
高 橋 舞 衣	つまらない平和	大阪府	大阪教育大学附属池田中学校三年	佳 作
原 田 晋之介	平和へのキッカケ	長崎県	長崎市立淵中学校一年	佳 作
今 川 あかり	祖母が伝えてくれたもの	島根県	出雲市立向陽中学校三年	
岩 崎 万 紘	平和への第一歩	大阪府	大阪教育大学附属池田中学校三年	
奥 川 朱希穂	人間の在り方	島根県	雲南市立吉田中学校三年	
城 島 宗 和	私たちが受け継ぐべきもの	大阪府	大阪教育大学附属池田中学校三年	

藤 原 叶 汰	博士と父	島根県	雲南市立大東小学校六年	佳 作
熱 田 心 來	令和の行く先は・・・	島根県	雲南市立加茂小学校六年	
石 橋 千 穂	「すごいね」を広げよう	島根県	雲南市立掛合小学校五年	
小 林 柚 穂	平和という歴史を刻んでいく	島根県	雲南市立加茂小学校六年	
嶋 田 詩 依	人を大切にするということ。	島根県	雲南市立加茂小学校六年	
山 根 和 栞	祖父の夢	島根県	雲南市立海潮小学校六年	
横 山 七 海	本当の笑顔	島根県	雲南市立加茂小学校六年	

富永 凛	祖父の言葉	沖縄県	うるま市立高江洲中学校二年	
藤山 さゆり	愛をもつて平和を願う	大阪府	大阪教育大学附属池田中学校三年	

【高校生の部】

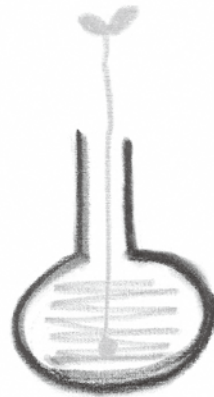
氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
中山 純花	誰かを想って	埼玉県	東洋英和女学院高等部三年	最優秀賞
馬屋原 瑠美	如己く私の核廃絶く	広島県	盈進中学高等学校二年	優秀賞
金城 琉夏	真の平和とは	沖縄県	沖縄県立首里高等学校三年	佳作
山口 俊樹	平和とは	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	佳作
浅野 葉菜	繋げよう愛の鎖を	島根県	島根県立松江南高等学校二年	
陸 杜緒子	忘れてはいけないよ	神奈川県	東洋英和女学院高等部二年	
小波津 大空	命の尊さ	沖縄県	KBC学園未来高等学校沖縄三年	
芝原 春菜	日本人と外国人	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
船井 海悠	少年の記憶	長崎県	長崎県立長崎南高等学校二年	
宮島 凛	私の志	東京都	学校法人山崎学園 富士見高等学校三年	

【一般の部】

氏名	テーマ	都道府県名	賞名
小松崎 潤	平和のたすき	東京都	最優秀賞
吉澤 恵子	私の願い	埼玉県	優秀賞
入倉 文子	なれし故郷を放たれて	山梨県	佳作
田村 智子	平和への道	神奈川県	佳作
太田 裕子	愛されるものは滅ぼされない	島根県	
小仁井 茅春	初めの一步	東京都	
小松崎 有美	国境と時代を越えた母の愛	埼玉県	
高野 亨	孫に残した戦争体験	埼玉県	
竹島 道子	愛とゆるしに基づく平和	島根県	
山尾 一郎	語り継ぐ	島根県	



NO



YES

KU
2007. 8. 26